



佐藤泰正

佐藤泰正

下關市

(1917~2015)

佐藤泰正は、山口県の地方私学（下関・梅光学院）で教員（中学・高校・大学・大学院）として教育に力を注ぎながら、一方で、文芸評論に新しい地平を切り開き、生涯にわたり日本近代文学研究の第一線を歩みつづけた。その業績は多方面にわたるが、今や、詩の世界から芥川賞とも位置づけられる中原中也賞の設立時から現在までの選考委員であり、日本の風土とキリスト教信仰といたく理解難な課題に取り組みつつづけた遠藤周作の最も大きな理解者であつたことに、その典型的を見ることができよう。その基底には、大学での学びの中で「ドストエフスキイ体験」があり、それは佐藤に「神に問う人間」と「神から問われる人間」という、往復的、複眼的思考をもたらすこととなつた。

トというペルソナとの対面を回避して、一般的なヒューマニズムに融解してしまった日本近代精神が象徴されていいる。」

「キリストというペルソナと対面する」とは、キリストによつて地上の苦しみから解放されることであると同時に、キリストによつて激しく問われることであり、もつと言えば、キリストにつまずくことであることを、高橋氏はよく理解していたのである。

佐藤は、評論家として作家とその作品を問うことは、そのまま、自己自身が問われることで、そこで返つてくる刃によつて血が流れる場所にしか、「眞実」は立ち昇つて来ないことを自覚し、生涯にわたつてそこ立ち続けた。それは対象を高みから批評するのでは

佐藤の名を世に知らしめたのは四十六歳の時の著は『近代日本文学とキリスト教・試論』である。そこには、宮沢賢治、中原中也、堀辰雄、遠藤周作、吉本隆晴などの著作が対象とされていて、卷頭に置かれた「文学と宗教におけるひとつ問題」は、斯界に深い問を投げかけるものとなつた。

語「西力の「ノル」」の一節である。我々を動かすであらう。それは、天から地上へ登る為に無残にも折れた梯子である。薄暗い空から叩きつける土砂降りの雨の中に、傾いたまま……。ここには、「神のひとり子」でありながら、地上に人

間として生まれ、その宣教に理解を得られぬまま処刑されたイエス・キリストの姿が、情緒的、かつ、鮮明に描かれていた。片山は今教皇吉野三義者をさういふ

としながらも「一方で宗教的救いを聖書に求めた」には、
芥川の「天から地上に登る」という非条理的な表現だが、当
時、日本近代文学研究の七草者であつて、吉田清一氏によ

【著作】

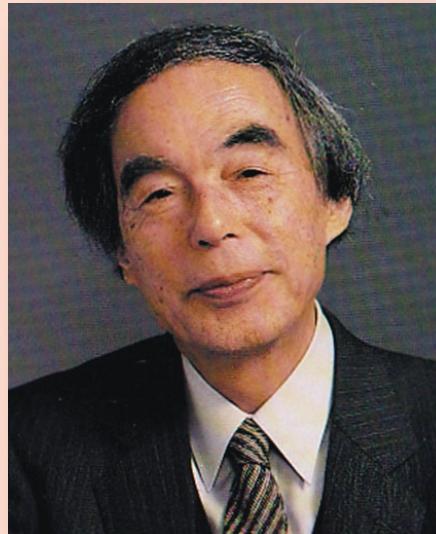
『近代日本文学とキリスト教・試論』

「文学その内なる神」 日本近代文学

吉田秋水集

【閱覽情報】

「佐藤泰正関連資料コーナー」設置
梅光学院大学図書館に



(文・中野新治)